

第1回 浮体式洋上風力発電施設の安全評価手法等検討会 議事概要

1. 検討会概要

○日時：令和5年11月6日（月）15:00分～17:00

○場所：海上技術安全研究所本館1階1A/オンライン

2. 議事概要

○事務局からの説明

- ・ 議題1 令和5年度事業の進め方について
- ・ 議題2 令和5年度事業の概要について
- ・ 議題3 将来検討すべき論点・課題の整理

○主なご意見

以下のようなご意見を踏まえて、事業を進めることになった。

- ・ 検査のガイドラインは、検査のタイミングで合否の判断ができるような内容でまとめてほしい。鋼製浮体は、船舶の知見を応用できるが、コンクリート浮体は前例が少ない中、判断材料を提示できるようにしてほしい。
- ・ 防食システムのガイドラインを取りまとめる際には、判断基準の提示も重要であるが、浮体によっても設計の考え方が多様であることも踏まえて、事業者等の意見を踏まえとりまとめてほしい。
- ・ 張力のモニタリング手法は、係留系に生じる微妙な性能低下をどの程度検出できるかがポイントになる。
- ・ 張力のモニタリング手法の実現に向けた課題である位置情報の精度は、かなり高い精度になるのではないかと推測される。水深や係留方式によって求められる精度を明らかにしていく必要がある。
- ・ 海洋生物付着の参考値を規定する際には、水産庁の「漁港・漁場の施設の設計参考図書」の基準値と、国内で調査した結果を踏まえて設定するのがよい。
- ・ 海洋生物付着の参考値を規定する際には、水産庁の「漁港・漁場の施設の設計参考図書」から数値を引用する場合であっても、海外事例等の数字と比較して誤解のないような記載をする必要がある。
- ・ 海洋生物付着の状況は、日本周辺の状況は複雑である。北日本と西日本、太平洋側と日本海側でも違う。また、海流における栄養塩の種類によっても差が出る。案として参考値を規定した後でも、継続的な情報の蓄積が重要である。
- ・ 係留ライン等の設計に関する事項については、「係留ラインに生じる最大張力に安全率をかけた荷重がかかっても耐えられる」という趣旨で、具体的な記載をするべきと考える。
- ・ 係留設備の定義の見直しの際には、ハイブリッド係留などの最新の動向をみて、今後想定される方式も踏まえる必要があるので、定義をあまり細分化する必要が無いと考える。